

第1学年 生活科の実践

授業者 幾左田 香織

1 単元名 「身近にあるもので遊ぼう」(全8時間 本時6時間目)

2 単元目標

身近にあるものを使って友だちと遊んだり、工夫して作ったりすることで、遊びのおもしろさや自然のふしぎさに気づき、みんなで遊びを楽しんだり、自分たちの生活を楽しくしたりすることができる。

3 「ひびきあう三の丸の子どもたち」にせまるために

研究課題「子どもが解決したい問題を持ち、友だちとひびき合いながら学習する子どもの育成」
手だて・・・子どもの願いや思いを見とった単元構想と授業づくり
低学年ブロックテーマ「感じる心、素直に表現する自分」
・人の言動に何かを感じる姿
・自分の思いや、他者からの刺激を受け止め、素直に表現する姿

<聴く・話すについての指導>

聞くときは、「反応しながら」「傷つく反応はしない」「最後まできちんと」「みんなの方を向いて」、話すときは「相手に伝わる声で」「へそを向けて」など、1年3組の聴く・話すとしてクラスのルールを決めた。

「聴く」については、「お～！いいね～！」「いっしょです。」など素直に反応し、話をきちんと聞いている場面も見られる。しかし、一部の特定の子どもたちの反応で終わってしまうことも多く、話は聞いていても、どう反応を示したらよいか分からない子どももいる。周りの反応に合わせて同じように反応したり、同じ意見のときに「同じです。」と示したりするなど、どのように話を聞くのがよいか学んでいるところである。また、話を最後まで聞かずに自分の意見を話してしまう子どももいるため、一番大事なことが全体に伝わらない場面がよく見られる。「最後まできちんと聞くことが友だちを大切にしていることにもつながっている。」ということを常に伝え、聞くことの指導をしている。

「話す」については、思いをもっている、失敗を恐れて発言できない子どもも多いため、「間違えてもいいんだ」という雰囲気づくりを大切に、取り組んできた。そのため、答えを間違えたり問題の意図とずれた発言をしたりする子どもがいても、「違うって言っちゃだめなんだよ。」「傷つくよ。」と、周りの子どもたちが優しく受け止める姿が少しずつ見られるようになってきた。「他にもあります。」と手を挙げて発言したり、否定的な反応をしたりしないなど、聞くときのルールを徹底することで話しやすい雰囲気が少しずつできてきており、思いを伝えようと頑張る姿が見られるようになってきた。しかし、そのような雰囲気の中でも、そもそも自分の思いをもつこと自体が難しい子どももいる。個別に声をかけ、思いをもたせるために絵や動きで表現をしたり、単語で話したことを文章に言い換えたり、友だちの意見を聞いていいなと思うものを選んだりするなどして、経験を積んでいる段階である。

<これまでの関わり合い・ひびき合い>

これまでの学習では、子どもたちの「やってみたい！」という気持ちを大切にに取り組んできた。特に国語の物語文では、登場人物になりきって動きを付けてやってみたいという気持ちが強く、動作化することで考えを深めてきた。

「おむすびころりん」でも、「おじいさんやねずみになりきってやったら、気持ちがわかるんじゃない？」

という子どもの言葉から、実際に動きをつけて、歌ったり踊ったりしながら登場人物の気持ちを考えた。物語の叙述にもとづいて、場面ごとのおじいさんやねずみの様子を確かめながら劇にしていた。すると、「おじいさん、そこで踊るんだよ。」「ねずみは穴の中にいるから、小さい声がいいんじゃない？」など、より良いものにしようと、子どもたち同士で声をかけ合う姿が見られた。ねずみの踊りが分からず、うまく踊れない友だちには、「こうやって踊るんだよ。」と実際に踊って見本を見せるなど、お互いに教え合う姿が見られた。実際に動きをつけたことで、子どもたちの知りたかった登場人物の気持ちにもせまることができ、「おじいさんは嬉しかったんだね。」「ねずみは、おじいさんにお礼の気持ちを込めて踊ったんだ。」など、文章を読むだけではわからなかった部分も、みんなで深めることができた。そのような関わり合いの中で「そこはこうじゃない？」「だってさ、」など、友だちの話を聞いてつなげていこうとする姿が見られたが、一部の積極的に意見を言える児童で話が進んでしまい、全体を巻き込んでの話し合いが難しかった。「今これについて話しているけど、どう？」と、一回立ち止まって切り返したり、意見を出すのをためらっていきそうな子を意図的に指名したりするなどして、話し合いに参加できにくい子どもたちも一緒に考えられるよう工夫していきたい。

4 単元と指導

<単元について>

本単元は、学習指導要領第1学年及び第2学年の目標の趣旨である、「身近な人々、社会及び自然と触れ合ったり関わり合ったりすることを通して、それらを工夫したり楽しんだりすることができ、活動のよさや大切さに気づき、自分たちの遊びや生活をよりよくしようとするようにする。」にあたる。

コロナ禍の中で、子どもたちは間隔をあけ、お互いが接触しないように工夫して遊んできた。本当はやりたい遊びがあっても、接触してしまうからできないなど、コロナの影響により限られた遊びを子どもたちなりに工夫しながら遊んでいる。そこで身近な物を使って、みんなで楽しく密にならずに今の状況にあった遊びをするにはどうしたらよいか、工夫しながら遊ぶことで、子どもたちの遊びの幅が広がるのではないかと考え、本単元を設定した。友だちとみんなで遊ぶ時間は、子どもたちにとってかけがえのない大切な時間であり、その身近な「遊びを工夫する」ということが、自分たちの問題としてより切実になっていくと考えられる。

身近な素材の一つで、図工でも使用した傘袋を使った飛行機づくりでは、傘袋に空気を入れて飛ばすだけでもある程度の飛距離が出る。友だちと距離を競い合う中で、さらにもっと遠くまで飛ばすには、どうしたらよいかを子どもたちは考えるだろう。羽を付けたり、重りを付けたり、よく飛ぶ子の傘袋飛行機を見て真似したりするなど、試行錯誤しながら作り、遊ぶと考えられる。羽を付けることだけでも、枚数や形、大きさなど考えられることはたくさんある。子どもたち自身で考え、意欲を持続させて取り組むことができると考えられる。

また、子どもたちは、誰が1番遠くまで飛ばせるかというような、競い合うゲームが大好きで、いつも大変盛り上がっているため、子どもたちの実態にも合った、楽しい魅力的な教材である。

<指導について>

競争など、競い合うゲームがとても好きな子どもたちなので、単元の最後には「傘袋飛ばし大会をしたい!」と考えることが予想される。そのために、子どもたちは「一番とぶ傘袋飛行機を作りたい!」と考えるであろう。初めに空気を入れた傘袋を飛ばし、持ち方や飛ばし方を考えて飛ばすと考えられる。そこから、羽をつけるなどして、遠くまで飛ばすための工夫を考えられるように場の設定を工夫していく。

本単元での解決したい問題は、「もっと遠くまで飛ばすにはどうしたらいいかな?」である。紙飛行機での経験をもとに、「羽をつけたらいい。」「大きい羽にしたらいい。」「3枚つけたらいい。」という様々な考えをもつだろう。しかし、まだ1年生の発達段階から、知らない言葉もたくさんあり、また「しくみ」を意識したり、構造的にみることが難しかったりすることから、うまく言葉にできず「3枚つけた

らシュって感じで飛ぶ。」など、擬音で終わってしまう場面も予想される。そこで「勢いよく飛ぶってことかな？」など、こちらが言い換えてあげることで、その言葉が語彙を豊かにし、相手に理解してもらえるような話し方に繋がっていけるようにしたい。そのために、たくさん活動することで経験を積ませたいと考えている。

本時での子どもたちの解決したい問題は、「羽を何枚にしたら遠くまで飛ぶのかな？」である。羽の枚数を何枚にしたら遠くまで飛ぶかを実際に作って試したり、比べたりしながら考えていきたい。そして、その経験したことをもとに自分の思いを伝え合う姿をひびき合いの姿としたい。間違えることが嫌で思いを伝えられない子どもたちには、同じ考えをもっている子どもと意見を交流したり、個別に声をかけたりして自信をつけてさせていきたい。また、自分の思いがもてず、話し合いにうまく参加できない子どもたちには、今何について話し合っているか立ち止まって整理したり、自分と同じ枚数で飛ばしていた子どもの考えを聞いたりしながら、自分の思いをもたせられるように声をかけていきたい。

5 単元構想

単元目標

身近にあるものを使って友だちと遊んだり、工夫して作ったりすることで、遊びのおもしろさや自然のふしぎさに気づき、みんなで遊びを楽しんだり、自分たちの生活を楽しくしたりすることができる。

みちかにあるものであそぼう

ちかづかないで、みんなのできるあそびはなにかな？①

- ・おにごっこ → 接触しちゃうからダメだよ。
- ・ドッジボール → ボールは使ってもいいのかなあ？
- ・パプリカを踊る → 近づかないでできるね。
- ・ジェスチャーゲーム → 楽しそう！ ちょっと恥ずかしいな。
- ・紙飛行機飛ばし大会 → 前にもやったね！
- ・傘袋を使って遊べないかな？ 紙飛行機みたいに飛ばして遊ん

【図工】「によきによきとびだせ」失敗した。
でも学校にはいっぱい傘袋があるんだね。

【体育】ドッジボール楽しいなあ。
【音楽】みんなでパプリカ踊ろう。
おぼけずかんも踊りたい。

だら楽しそう！

- ・牛乳パックでも遊べそうだね。船作りたいな。
- ・プリンの容器で遊べないかな。・紙コップで風車にしたい！
- ・ペットボトルでロケット作りたい。

＝ ＝ ＝ ＝ ＝ ＝ ＝ ＝ ＝ ＝
「身近なものに関心をもち、ソーシャルディ
スタンスで遊べそうな遊びを考えることができ
る。(学びに向かう力)」
＝ ＝ ＝ ＝ ＝ ＝ ＝ ＝ ＝ ＝

かさぶくろひこうきを飛ばしたいな。②

- ・飛んだ！ ・ふわって飛ぶね。
- ・飛ばないな、落ちちゃう。
- ・どっち向きで飛ばすの？
- ・どこを持つの？
- ・もっと遠くまで飛ばしたい！
- ・くしゃくしゃのは飛ばないよ。
空気がパンパンじゃないと！

どうやって飛ばしたらいいのかな？

- ・結んである方が前だと飛ぶ。
- ・やさしく、まっすぐ投げる。
- ・空気がぱんぱんだととぶ。
- ・しわしわだたとばない。
- ・もっと遠くまでいかないかな？
- ・画用紙とかで羽をつけたら？

＝ ＝ ＝ ＝ ＝ ＝
「傘袋をたくさん用意
しておく。」
＝ ＝ ＝ ＝ ＝ ＝

『 ＝ ＝ ＝ ＝ ＝ ＝ 』
「飛ばし方を工夫しよう
としている。」
「(思考・表現)」
『 ＝ ＝ ＝ ＝ ＝ ＝ 』

羽をつけたら遠くまでとぶかな？③

- ・羽を付けたら飛ぶと思う。紙飛行機みたいに。
- ・折り紙とかで羽を付けたらいいと思う。
- ・つくってとばしてみよう。

＝ ＝ ＝ ＝ ＝ ＝ ＝ ＝ ＝ ＝
「材料セットを用意しておく。」
「・膨らませた傘袋 ・三角や四角の紙
・マスキングテープ ・折り紙」
＝ ＝ ＝ ＝ ＝ ＝ ＝ ＝ ＝ ＝

どうしたらもっと遠くまでとぶのかな？④

羽の枚数	羽の形	なんかつける	何もつけない
・ 2枚 ・ 3枚 ・ 4枚以上	・ 丸い羽、長い丸 ・ 三角、四角 ・ 鳥の羽 ・ 細長い	・ 折り紙 ・ 画用紙 ・ 紙飛行機 ・ テープ	・ 羽なし ・ 折り紙とかにつけない

なんかつける

- ・何もつけない
- ・つけると重くて落ちちゃう
- ・つけなくても飛んでた
- ・先につける
- ・先が軽くて浮いちゃうから遠くまで飛ばない
- ・少し重さがあった方がいい

＝ ＝ ＝ ＝ ＝ ＝ ＝ ＝ ＝ ＝
「飛ぶための様々な要因に気付
くよう、作ったり、試したりで
きる場の設定を工夫する。」
＝ ＝ ＝ ＝ ＝ ＝ ＝ ＝ ＝ ＝

- ・前の方につけるといい。 ・後ろはダメ。 ・なんかっておもりのことだったんだ！

もっと遠くまでとぶには、どんな羽の形がいいのかな？⑤

- | | | | | | | |
|-------------|---|----|---|-----------|---|-----|
| 三角 | ⇔ | 四角 | ⇔ | 丸 | ⇔ | 鳥の羽 |
| ・ロケットみたいに | | | | ・飛行機は長い丸 | | |
| ・長四角がいいと思う | | | | ・鳥みたいな細い羽 | | |
| ・四角の方が羽をうけて | | | | ・パタパタってとぶ | | |
| 飛びそう | | | | | | |

工夫したことを教えあうことができるように、声かけをしたり、問いかけたりする。

羽を何枚にしたら遠くまで飛ぶのかな？⑥本時

- | | | | |
|---------------|----|-----------------|------|
| 1枚 | 2枚 | 3枚 | 4枚以上 |
| ・つけるぎると飛ばないから | | ・重いほうが飛ぶ | |
| ・紙飛行機も羽を2枚だから | | ・3枚ならちょうどいい | |
| ・いっぱいつけると重くなる | | ・ちょっと重りがあった方がいい | |
| ・軽い方が飛ぶ | | ・軽すぎるととばない | |
| ・2枚で飛んだ | | ・2枚じゃ飛ばない。 | |

・羽の枚数を何枚にしたらよいか自分なりに考え、おもちゃの作り方や遊び方を工夫している。(思・表)

・遊びの楽しさや遊びを工夫したりする面白さに気付いている。(学びに向かう力)

・重りと羽のバランス、羽の枚数、投げ方、すべてが整うことでよく飛ぶということを、活動することを通して理解することができる。(知識・技能)

- ・先に重りをつけたらいいんだな。
- ・テープはつけすぎると重くてとばなくなっちゃうよ。
- ・羽は4枚が1番飛ぶね。 ・1番飛ぶのを作りたいな。
- ・またみんなで競争したい！

かさぶくろひこうき飛ばし大会をしよう！⑦

- ・一番飛ぶのを作ろう！
- ・だれのが一番遠くまで飛ぶかな。
- ・もっと遊びたい！
- ・他のおもちゃも作りたいな。

・体全体で感じながら、友だちと一緒に楽しく遊ぼうとしている。

・自分たちで遊びを作り出す面白さに気付いている。(学びに向かう力)

他のおもちゃも作りたいな⑧

<調べてきた物を紹介する>

- ・風鈴 ・コマ ・風車
- ・けん玉 ・

・紙皿、紙コップ、ペットボトル、ペットボトルのキャップ、牛乳パックなど、身近な物を使って友だちと楽しく遊べるように、場の設定を工夫する。

<作ってみよう>

- ・友だちに教えてもらいながら作ると面白いね！
- ・作って見せ合おう！

・身近な物で遊ぶ面白さ、友だちや自分のよさ、成長などに気付いている。(学びに向かう力・人間性)

6 本時について

(1) 本時目標 傘袋飛行機を遠くまで飛ばすために、工夫できることを考えて作ろうとすることができる。(6/8)

(2) 本時展開

学 習 活 動		主な支援・留意点 ◆評価【観点】
はねを なんまいつけると とおくまでとぶのかな		○これまでの学習を振り返り、傘袋飛行機についての考えを思い出す。
1 まい おもりと ちょうど いいおも さ	2 まい ・かるい ・かみひこ うきのは ねみたい ・かぜをう けやすい	○自分の考えに近い所にネームプレートを貼らせ、考えをはっきりさせる。
3 まい まっすぐ とぶ	4 まい ばらんす が いい	○考えの根拠になったことを話し合わせる。
5 まい ちょうど いい重さ だから	6 まい 少し重く した方が よくとび そう	○制作する時間を確保する。
10 まい ・うしろが重 いほうい い		○話し合いと傘袋飛行機作りを繰り返す中で自分の考えをまとめられるようにする。
ネーム		○友だちと自分の作ったものを見比べる時間を作り、互いの工夫を見つける。
		○遠くまで飛ばすにはどうしたらよいかを考えを持つ【気づき】

7 実践を終えて

【本時について】

○成果と課題

本時では、「傘袋飛行機を遠くまで飛ばしたい!」という意欲をもって、子どもたちは夢中になって取り組むことができていた。作る場所や飛ばす場所など場所を分けたことによって、子どもたちは自分で考えた傘袋飛行機を自由に試行錯誤しながら作ることができていた。

単元の流れで子どもたちは、「今日はおもりを変化させたい。」「今日は羽をつける場所を変えたい。」など、一つひとつの条件でどれが一番飛ぶかを考えたいと思っていた。そのため、本時では羽の枚数に絞って授業を展開したが、子どもたちは、おもりをたくさんつけたり、羽の場所を変えてみたりと、枚数だけではない、他の条件を組み合わせた考えをもっているようだった。羽の枚数に限定することなく、とにかく遠くに飛ばしたいという思いでいろいろと工夫する中で、子どもたち同士で意見を交わしながら作って飛ばしたほうが、ひびき合う場面が見られたのではないかと考えられる。しかし、どれかに絞って話し合いをしないと、話し合いの幅が広がりすぎてしまい、みんなが同じ方向を向いて話すことが難しいのではないかと考えられる。そのため、子どもたち同士が自由に作りながら話した方がよいのか、一つの考えについて話し合った方がよいのか、どちらが子どもたちの実態に合っているのか見極める必要があった。

また、本時では羽は4枚が一番飛ぶことが分かったが、なぜ4枚が一番飛ぶのかを話し合わせるところで、ひびき合う姿が見られたのではなかと考えられる。活動し、話し合い、試して比べて確かめるといった生活科の目標が達成できるよう、時間配分も考える必要があった。

【本時後について】

羽を4枚にした方がよく飛ぶと分かった子どもたちは、自分も4枚にしたいと考え4枚にして飛ばす子どもが多かった。また、羽の付け方も、傘袋に垂直につけた方がよく飛ぶことが分かり、付け方も工夫していた。しかし、羽を4枚にするよりももっと飛ぶのを作りたいと、自分なりの傘袋飛行機を作ろうと考え、工夫して作っている子どももいた。その様子からも、本時では自由に活動させ、比べたり確かめたりしながら活動した方がよりひびき合ったのではないかと考えられる。

またその後の生活科では、どんぐりを使ってどんぐりカーレースをした。子どもたちは競い合うことが大好きなので、傘袋飛行機のように「遠くまで走るのを作るぞ。」と夢中になって取り組んでいた。「また作る場所と試す場所をつくろう。」「傘袋飛行機の時みたいにどんぐりの数とか、いろいろ変えてやってみたい。」と傘袋飛行機での経験がどんぐりカーレースの中でも活かしていた。

生活科の授業を通して、常に教科の目標を意識することが必要であることを改めて感じた。その上でひびき合うためにどう焦点化するかなど、子どもたちの「やってみたい。」という意欲や思考を大切にしながら、日々の授業につなげていきたい。